

膀胱憩室扁平上皮癌の1例

岩手県立千厩病院泌尿器科 (科長: 阿部俊和)

阿部 俊和, 小成 晋

岩手医科大学泌尿器科学教室 (主任: 藤岡知昭教授)

小原 航, 岡本 知士, 藤岡 知昭

A CASE OF SQUAMOUS CELL CARCINOMA ARISING
IN THE URINARY BLADDER DIVERTICULUM

Toshikazu ABE and Susumu KONARI

From the Department of Urology, Iwate Prefectural Senmaya Hospital

Wataru OBARA, Tomoshi OKAMOTO and Tomoaki FUJIOKA

From the Department of Urology, Iwate Medical University

A 49-year-old man was admitted to our hospital with the chief complaint of difficulty of urination, lower abdominal pain and macrohematuria. On cystoscopy, a non-papillary tumor was seen in the diverticulum on the right side of the urinary bladder.

Having made the diagnosis of urinary bladder cancer, we performed total cystectomy, retroperitoneal node dissection and construction of an ileal neobladder. Histologically, it was squamous cell carcinoma, pT3a, pN0. Seven months after the operation, the patient died of recurrent disease.

(Acta Urol. Jpn. 46 : 553-555, 2000)

Key words: Urinary bladder diverticulum, Squamous cell carcinoma

緒 言

膀胱憩室癌は比較的稀な疾患で、本邦において160例程度が報告されている¹⁾。その好発年齢は60~70歳代で40歳代の報告例は散見されるに過ぎない。今回われわれは40歳代男性に発症した膀胱憩室扁平上皮癌に対し神経温存膀胱全摘除術、回腸代用新膀胱形成術を施行した。若干の文献的考察と共に報告する。

症 例

患者: 49歳, 男性

主訴: 排尿困難, 下腹部痛, 肉眼的血尿

既往歴: 20歳代に膀胱憩室結石で経尿道的碎石術 (詳細不詳)

家族歴: 特記事項なし

現病歴: 1997年12月下旬より排尿困難, 下腹部痛が出現, 肉眼的血尿も生じてきたため1998年1月6日当科を初診した。

現症: 体格中等度, 栄養状態良好, 眼瞼結膜に貧血を認めず, 眼球結膜に黄疸を認めない。胸部理学的所見に異常なく, 表在リンパ節の腫大も認めない。肝, 脾, 腎とも触知せず, 膀胱部においても腫瘍は触知されない。前立腺にも異常はみられなかった。

検査成績: 末梢血液像, 血液生化学検査ともに異常なし。尿は肉眼的血尿で, 尿細胞診では扁平上皮癌の疑いであった。24時間 Ccr 88.9 ml/min と腎機能は良好であった。

膀胱鏡検査: 肉眼的血尿を伴っていたため初診時に膀胱鏡検査を施行, 膀胱の右側壁に憩室を認め内腔より突出する非乳頭状腫瘍を認めた (Fig. 1)。生検ではTCC, G2であった。



Fig. 1. Cystoscopic findings. A nodular tumor was seen in the diverticulum. → diverticular neck, —→ tumor.

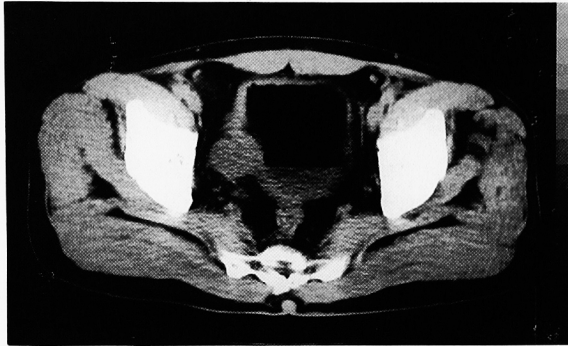


Fig. 2. CT scan revealed a tumor of heterogeneous density on the right lateral wall of the urinary bladder. Infiltration into the peripheral tissue was not seen.

画像診断：IVPでは右水腎症を認めた。CTでは膀胱の右側壁に不均一な density の腫瘍を認めたが壁外への浸潤はみられなかった (Fig. 2)。肝転移および骨盤内リンパ節の腫脹もみられなかった。膀胱造影では憩室および憩室内腫瘍とも描出できなかったが膀胱壁の伸展は良好であった。膀胱腔内エコーでも壁外浸潤は認めなかった。骨シンチ上骨転移も認めなかった。

以上の検査結果より膀胱癌 T3, N0, M0 と診断し 2月18日膀胱全摘除術、骨盤内リンパ節郭清および回腸新膀胱形成術を施行した。

手術所見：膀胱右側壁に腫瘍が触知されたが周囲との癒着はなく剝離摘出は容易であった。膀胱全摘に際し左側において神経温存を行った。骨盤内リンパ節の腫大はみられなかった。新膀胱は Studer 法で行い、尿管回腸吻合では逆流防止術は行わなかった。

摘出標本：憩室内に径 3.5 cm の非乳頭状腫瘍がみられたが、肉眼的に壁外浸潤はみられなかった。病理組織学的検索では中分化型扁平上皮癌で pT3a, pN0 であった (Fig. 3)。

術後経過：術後イレウスを生じたが、保存療法にて

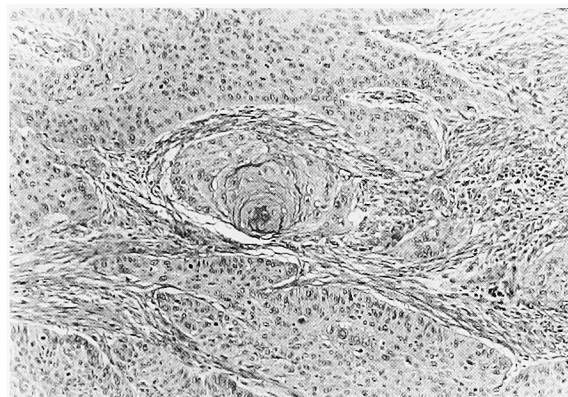


Fig. 3. Microscopic findings showed moderately differentiated squamous cell carcinoma (HE stain).

治療し術後59日目に退院となった。患者は自排尿可能で残尿もほとんどなく入院中に勃起も確認できた。5月中旬より会陰部痛が生じ、再発を考え CT を施行したが再発を示唆するような所見は認められなかった。鎮痛剤を投与していたが疼痛が続くため 5月29日他院のペインクリニックを受診し入院した。同院において神経ブロック等の加療を受けたが小骨盤腔の局所再発と尿管新膀胱吻合部の再発が生じ1998年9月11日 (術後7カ月) 他院にて癌死した。

考 察

本邦において膀胱憩室腫瘍は160例以上報告されており、奥山²⁾らの報告では男女比4.7:1、好発年齢は60~70歳代で平均年齢65.4歳であった。組織型では通常の膀胱癌に比して扁平上皮癌の占める割合が高く22%であった。

一般に膀胱癌の男女比は2:1と2倍程度男性に多いと報告されている。膀胱原発扁平上皮癌に限定すると男女比1:1.3と女性に多い³⁾。それにもかかわらず膀胱憩室腫瘍では前述のごとく圧倒的に男性優位であるが、これは膀胱憩室の発生頻度に依存していると考えられている。

後天性膀胱憩室は70歳代以上の高齢者に多く、この主たる原因は bladder outlet obstruction によるものと考えられている。すなわち前立腺肥大症などの下部尿路閉塞に伴うものが多いため男性優位となっている。しかしながら、本症例においては20歳代で膀胱憩室を指摘されており、臨床所見からも後天性の憩室を支持する根拠は乏しかった。

膀胱憩室に腫瘍が発生する頻度は呉⁴⁾の文献的検索では1.7~8.6%程度で、その原因は憩室内の尿停滞に続発する尿路感染および結石形成が引き金になるとされている。本症例においても膀胱憩室結石の既往があり本説を支持するものであった。

診断は膀胱鏡検査やX線学的検査でつけられる頻度が高いが⁵⁾、最近では超音波検査や MRI の有用性についても報告されている^{6,7)}。膀胱憩室腫瘍では憩室壁の菲薄さのため発見時に浸潤しているものが多く、その予後は不良である^{8,9)}。予後を向上させるためには早期発見が必要と思われるが、早期発見のためには膀胱憩室内に発症する新生物の頻度の高さを考慮し Montague ら¹⁰⁾の報告のごとく憩室に対して積極的に内視鏡および放射線学的な検索を行う必要がある。

予後が不良な疾患であるにもかかわらず本症例で敢えて回腸膀胱形成術を選択したのは、患者が強く望んだ事の他に40歳代と若く性的活動を含めた QOL を考慮したこと、また、生検では TCC, G2 で、術中所見で浸潤、リンパ節の腫大をみなかったためであ

る。しかし、間もなく再発し死亡に到ったことを考えれば本症例での術式が QOL の向上に結びついたかどうかは疑問であり、むしろ入院期間が短くてすむ他の尿路変更を選択した方が良かったのかもしれない。

治療に関しての最近の報告では膀胱全摘術を選択する傾向にあるが、160数例中扁平上皮癌は40数例と数も少なく標準的な治療法も確立されていない。本症例のように全摘を施行しても予後が不良なことも多く、化学療法¹¹⁾、放射線療法¹²⁾の併用などグループワークとしての集学的な治療法の確立が必要であると思われる。

結 語

40歳代に発症した膀胱憩室扁平上皮癌の1例を報告した。本症例では膀胱全摘術、回腸膀胱形成術を選択したが再発により術後7カ月で癌死に到った。本症に対する手術療法、尿路再建法を含め集学的治療法の確立が切に望まれた。

文 献

- 1) 田中雅博, 田中宣道, 仲川嘉紀, ほか: 膀胱憩室扁平上皮癌の1例. 日生病医誌 **22**: 207-211, 1994
- 2) 奥山光彦, 倉 達彦, 山口 聡, ほか: 膀胱憩室腫瘍の3例. 泌尿紀要 **38**: 715-720, 1992

- 3) 杉本浩造, 中川修一, 三神一哉, ほか: 膀胱扁平上皮癌9例の臨床的検討. 西日泌尿 **56**: 1148-1151, 1994
- 4) 呉 幹純, 入江 啓, 野村一雄, ほか: 膀胱憩室腫瘍の2例. 泌尿紀要 **33**: 779-785, 1987
- 5) 森下文夫, 山崎義久, 前田 真, ほか: 膀胱憩室腫瘍の1例と本邦82例における統計的観察. 泌尿紀要 **24**: 955-969, 1978
- 6) 辛島 尚, 笠原高太郎, 橋根勝義, ほか: 腹部超音波検査にて偶然発見された膀胱憩室扁平上皮癌の1例. 西日泌尿 **59**: 771-773, 1997
- 7) 伊藤敬一, 頼母木洋, 長谷川親太郎: 膀胱憩室原発腺癌の1例. 泌尿紀要 **43**: 871-874, 1997
- 8) 安永 豊, 小角幸人, 岡 聖次, ほか: 膀胱憩室腫瘍の1例. 西日泌尿 **51**: 1221-1224, 1989
- 9) Abeshouse BS and Goldstein AE: Primary carcinoma in a diverticulum of the bladder: a report of four cases and a review of literature. J Urol **49**: 534, 1943
- 10) Montague DK and Boltuch RL: Primary neoplasms in vesical diverticula: report of 10 cases. J Urol **116**: 41-42, 1976
- 11) 林 俊秀, 那須保友, 荒巻謙二: 膀胱憩室扁平上皮癌の1例. 西日泌尿 **51**: 1259, 1989
- 12) 久保 隆, 阿部俊和: 遠隔成績よりみた浸潤膀胱癌予後向上の治療法. 岩手医誌 **47**: 675-683, 1996

(Received on February 7, 2000)
(Accepted on April 18, 2000)